



天津の 120 日間

国語教育講座教授
橋本博孝



中国語はもちろん英語もできないのに大丈夫かなと、私よりも周りの皆さんが思われたんじゃないでしょうか。何とか 120 日間の任を終えることができました。

私の場合は、早瀬先生が前段を担当していただいた道の筋を整えておいてくださったので、授業にはスムーズに入れました。学生たちも熱心に学び、三重大で講義を受けるのにまだ必ずしも十分な日本語力とは言えない側面もありますが、あと半年間で急速に前進しうだろうと思われる段階に来ていると見えました。

天津の街並みや暮らしについては、これまでに行かれた皆さんが御経験を述べておられます。120 日間いますと、それらが納得できたり、また違う体験ができたりでした。

天津で日本語の堪能な民間の方と話す機会がありました。その方が言われるには、外見上は中国や韓国の方と区別がつかなくても日本人とすぐ分かる特徴が 3 つあるとのこと。一つは横断歩道で信号が変わるのを待つこと。オリンピックで交通マナーは向上したようですが、天津ではまだまだ「どこでもいつでも」横断が普通でした。もう一つは、食事の前に「いただきます」と言うこと。これは小学校時代の給食の影響でしょうか。私は長く小学校の教員でしたから、旅先でも家でも飲み屋でも「いただきます」と言う習慣がついています。

さて、3 つ目は何でしょうか。それは、現在の中国を日本の 1960~70 年代と比べてやたら「懐かしい」を連発することだそうです。中国は遅れているとはっきり言いたがる人も多いそうですが、そんな意識がなくても「懐かしい」と言うそうです。実際の風景は大陸と島国ですからずいぶん違います。天津で言いますと、高層ビルが立ち並び、地下鉄が走り、とても「懐かしい」どころではありません。でも、人々の暮らしの中には確かにそう感じさせるものがあるのでしょうか。実は、使っていた日本語の教科書にも中国のことは書いていませんが、そのように感じる日本人が描かれていました。

ところで、そう思われる現地の人々は、日本人のそんな反応をどう受けとめるのでしょうか。私は学生たちの作文の課題にそれを出してみました。

「私のふるさとが外国人を懐かしい気持ちにならせることは、その人がふるさとを好きになったということだからうれしい。」

「遅れていると言われているようで不愉快だ。」

「あなたの国は今どんな国?と聞いてみたい。」

「むかつく。ふるさととは私が生まれ育ったただ一つの所だから、比べられたくない。」

特徴的な意見を要約するとこのようになります。「むかつく」という単語は、彼らが読んでいる日本のコミックか見ているテレビドラマで仕入れたのでしょうか。

現在の日本に来る外国の方々、この国に何を感じるのでしょうか。文明や文化を測る共通の物差しはありません。比較はできてでも序列づけてはならないのだと思いました。そのこともふくめて、日本と日本語を外から考える経験ができた 120 日間でした。



橋本先生と対面する天津師範大学の学生たち。どの学生も笑顔でうれしそうな表情。

■音楽の中で出会う■

音楽教育講座准教授 根津知佳子

8月6日から12日まで、天津師範大学の4名の先生方に、学生の実践現場で過ごしていただきました。まず7日に、「教育実地研究基礎」でお世話になっている東橋内中学校のブラスバンド部15名と、「放課後の音楽室」のMくん親子をお招きし、交流音楽会を開催しました。中学生も学生達も、歌や舞踊の表現の豊かさに驚いていました。9日からは、長野県伊那市で開催したウィリアムズ症候群の家族を対象とした“芸術キャンプ”に参加していただき、いくつかのセッションをお願いしました。

何回か打ち合わせはしましたが、「音楽の中で出会う」ということを大事にしたいと思い、セッションの内容については、天津の先生方にお任せしていました。最初は、すべて即興的に進んでいくという形態にとまどっているようでしたが、すべてを丸ごと受け止めて、子どもたちのために考えたオリジナルの活動を展開していただいたことに感謝しています。

罗晓颖 LUO XIAO YINGさんと刘海涛 LIU HAI TAOには、歌を中心としたセッション、陈雯 CHEN WENさんには、動きを通じたセッションをお願いしました。

あるキャンパーは、「話している中国語はわからなかったけど、ジェスチャーを交えてくれたから、わかりました。」という感想を寄せてくれました。彼のお母さんは、「度々、言葉はわからなかったけどというフレーズが出ました。言葉はなくとも、一緒に時間を過ごすことで感じあえる何かがあったのだろうと思っています。」と補足しています。また、幼いキャンパーのお母さんからは、「今回のキャンプでは普段体験することができない異文化との交流を通して、子ども自身いつもと違う“何か”を心に深く刻んだように思えます。その“何か”とは、まだ幼い彼には説明ができませんが、キャンプ後の様子から感じ取ることができました。また、言葉は違っても少しも気後れすることもなく天津の方たちにコミュニケーションを果敢にとる子どもたちの様子を見て、言葉なくして触れ合えるすばらしさをあらためて実感することができました。」という感想が届きました。

数日間通訳として活躍していただいた大学院生の楊欣さんは、「言葉が通じなくても、手振り身ぶりを通し、交流する先生方の姿が見られました。音楽には国境がないと聞いたことがありますが、この活動を通し、初めて実感することができました。音楽のすばらしさというものでしょうか。」と述べています。また、楊静さんは、「劉先生は子どもたちに手品を教えたりして、“私たち通訳がいなくても、大丈夫じゃない？”と思うほどでした。言葉が通じるより、心が通じ合うことの大切さがあらためて考えさせられました。」と述べています。

団長の吴春发 WU CHUN FAさんはじめ、みなさんには、ご家

族との野球大会にも参加していただきました。交流会（おやじ&おふくろの会）に参加した“おやじさんたち”からは、次のような感想をいただきました。「日本語、英語（?）、中国語（??）を交えてコミュニケーションをしていて感じたのは、子どもたちの話題であれば意思が伝わるといことでした。彼らも子どもたちの一人一人をよく見ていたことが伝わりました。信州の空の下、彼らと一緒に飲むことが出来たのは大変うれしい経験でした」「中国に比べると、日本は障害者へのサポートが進んでいて、親の意識も高い、とおっしゃっていました。同じことを我々は欧米に対して感じています。我々がアメリカやイギリスから学んだことを伝えられたら、とても素晴らしいことです。制度・歴史・国情が同じではないので、難しい問題がいろいろあると思いますが、みんなが協力し合えば乗り越えられると信じています。また、民族の伝統を守り広く伝えていることは素晴らしいと思いました。」



手が歌っている・・・という、子どもたちの声（陳さんのパフォーマンス）

この夏、音楽の中で中国のゲストの皆さんと出会った子どもたち・・・。わずかな時間しか共有できませんでしたが、「離れていてもつながっている感覚」を持ちながら、それぞれの生活の場に戻っています。言葉は通じなくても、心を通わせることができた自信は、それぞれの生活において“勇気”に変っていくことと信じています。

最後になりましたが、今回の交流に関し三重大学 COE(B)のメンバーの皆様のご理解とご協力に感謝申し上げます。国際交流委員会の皆様にも、ご尽力いただきました。また、丁寧にこの交流を支えていただいた事務の方々に、心から感謝申し上げます。今後もこのような様々な機会を通して、本学と天津師範大学との交流が盛んになりますことを祈念いたします。

最後に、今回の交流に関し三重大学 COE(B)のメンバーの皆様のご理解とご協力に感謝申し上げます。国際交流委員会の皆様にも、ご尽力いただきました。また、丁寧にこの交流を支えていただいた事務の方々に、心から感謝申し上げます。今後もこのような様々な機会を通して、本学と天津師範大学との交流が盛んになりますことを祈念いたします。

国際交流 ニュースレター No. 6 目次

- 天津の120日間 国語教育講座教授 橋本博孝
- 音楽の中で出会う 音楽教育講座准教授 根津知佳子
- フルブライト訪問団「三重大学の印象」
. コニー・コーカー技術教育学習課程専門職員
米国ノースカロライナ州 シャーロット・ラテン語学校
- 多文化共生教育公開講演会 2008 音楽教育講座教授 桂直美
- 三重大学での1年間 河南師範大学交換留学生 / 王旭 趙科 李淵慧

私たちアメリカ人教員は、合衆国の違った地域から集まったよそ者として日本に到着し、友人として日本を離れました。日本を離れるときには、この3週間の訪問期間中に会った人々への敬意と深く知ることのできた日本の習慣や文化に対する理解が心に宿っていました。

私と同僚 159 名は日本メモリアル・フルブライト教員研究者として3週間の日本視察旅行に参加するよう招待を受けました。この交流の目的は、日米両国の人間が、特に教育に関する問題について、さまざまな意見交換をすることでした。私たちの視察旅行は、まず東京で日本の経済や芸術、政治、そして教育改革について講義を受けることから始まり、2週間目には16人ずつの小グループに分かれて日本全国の学校を訪れました。

私と他 15 名の教育関係者たちには三重県訪問が充てられ、最初の公式訪問が三重大学でした。私たちは訪問の前夜、懸命に三重大学のキャンパスマップを見て、三重大学について勉強しましたが、豊田学長にお会いするために到着したとき、その大きなキャンパスに感動しました。豊田学長は自己紹介をされ、私たちを暖かく三重大学に迎えてくださいました。豊田先生がテネシー州のナッシュヴィルで医学博士になれるまでそこにお住まいだったとお聞きして、そこは私の故郷ノックスヴィルのすぐ近くの町でしたので、驚くとともに嬉しくなりました。お嬢様がテネシー州の学校に通われたことや先生が日本への帰国のことをお話になられたとき、私たちの知らない間に実に多くの人生が幾度となく交わっていることを知りました。

次に、私たちは教育学部副学部長の河崎道夫先生にお会いする機会を得ました。挨拶を交わした後、簡単な質疑応答の時間をもち、いま私たちがアメリカで取り組んでいる多くの問題と同じ教育問題が日本にも広がっているということをお聞きしてとても元気づけられました。

その後、紹介と意見交換のために設けられた大きな部屋に場所を移して、教育学部の教員の方々および学生さんたちとの話し合いは続きました。三重大学の先生方や学生の方々の自己紹介と私たちアメリカ人教員の自己紹介はかなり面白いものでした。私た

ちは日本語で自己紹介をしようとそれまでの一週間ずっと練習していましたが、大勢の前で初めて日本語を話すのはとても緊張しました。うまくやれたと願っています。三重大学の教授の方や学生の方々の英語にはとても感心しました。私たちの日本語は三重大学側の英語に比べるとあまり上手なものではありませんでした。

全体を通して、訪問期間中に交わした話し合いには啓発されました。私は三重大学の共同研究、遠隔授業、そしてテクノロジーの高度利用に深い感銘を受けました。また、三重大学の学生がノースカロライナ大学ウィルミントン校（この大学は今私が勤めている学校のすぐ近くにいます）の学生と交流しているのを知ったのも驚きでした。学生と教員、その他の者たちがテクノロジーを用いて連絡しあい、共同している様子は刺激的でした。テクノロジーの利用という点では合衆国の方が遅れているように見受けられます。三重大学は私たちがこうしたいと願っている例を示して下さいました。

私たちは日本の高等教育に対してこれまで以上に大きな敬意の念と、違った文化が一つに溶け合い、この私たちの地球社会の未来に資するであろう考え方を共有する希望を抱いて三重大学を後にしました。私たちは2008年北京オリンピックに世界が集うことを知っておりますが、オリンピックのモットー「より速く、より高く、より強く」をすばらしいと思わないわけにはいきません。それこそが私たち全てが求めているものです。すなわち、私たちの社会と私たち自身の生活における進歩です。しかし、私たち同僚の一人が豊田学長との会見で述べましたように、そのモットーにもう一語付け加えるべきでしょう。「共に、より速く、より高く、より強く」と。私たちは地球規模で互いから多くを学び、互いに協力することがなければ、進歩を達成することは不可能だからです。

アメリカ人教員を暖かい気持ちで日本にお招きいただき、ありがとうございました。三重大学でうけたおもてなしとそこで学んだ貴重な教養に心から感謝申し上げます。

(英文より翻訳：宮地信弘)



6月16日、日本フルブライト・メモリアル基金による米国教育者一行が三重大学を訪問され、メディアホールで教育学部教員および学生と意見交換を行いました。

8月28日、「多文化共生教育公開講演会 2008」が教育学部国際交流委員会と三重県外国人教育研究会（県外教）との共催で開かれた。外国人児童生徒の増加に伴う教育環境の変革が求められている現在、現職教員を中心としたネットワークを持つ三重県外教と企画段階から実施まで連携した、教育学部として初めての試みであった。

最も印象的だったのは、日系ブラジル人・ペルー人の学生や保護者の生の語りであった。インタビューを通して、ニューカマーの子どもたちの側から見た日本の学校体験が三人三様に生き生きと伝わってくる。小学時代に日本に来た時の驚き。たとえば、スリッパをはくこと、学校で子どもが掃除をすること、和式トイレがわからず逆さまに使ったこと、都会育ちで日本に来たら山だらけで驚いた等。友達ができない学校生活にも増してつらいのは、言葉のハンディに対するケアがないので勉強がわからないこと。ブラジルでは優等生だったのに、日本でテストの問題の意味も分からず零点になり、トイレで泣いたという話。また、将来への夢。例えば、多言語を生かして外交官になりたい、医師にもなりたいけれども子どもたちに勉強も教えたい、社会学者になりたいなど。また、保護者であり、松阪市の巡回指導員でもあるジルマさんの話には、小学生の娘に「友だちがいなくても良い。一人でも生きていける。」と教えざるを得なかった後悔や、その大事な時期を取り返すことのできないつらさが溢れていた。

一人ひとりが、将来何をしていきたいかという夢を持ちながら今を懸命に生きている。話を聞きながら、いかに外国人の子どもたちへの私たちの理解がステレオタイプ化されていたものであったかを思い知らされた。とりわけ学校現場では、目の前の外国人の子どもたちがとりあえず教室にちゃんと座ってさえいれば良しとしてしまいがちだ。また彼らが学校を離れる理由が、いじめよりも学校の勉強がわからないことや将来が見えないことにあるというのを知らない。ニューカマーの子どもたちにも将来が描けるような学習環境作りや進路ガイダンスが必要なのである。小島祥美氏の講演は、そうした学習保障が現実がいかに不足しているかをデータに基づいて明らかにした。また子どもたちの実態把握の必要と、学校外での「初期指導」から学校内での「国際教室」、そして在籍学級での指導や支援へと、ステップを踏んで連携していく方法論を提示した。国籍にかかわらず地域に在住するすべての子どもに行政が「教育を受ける権利を保障」をすること、コミュニティー全体で彼らへの理解を深めていくことが如何に重要か。教育者と市民と行政の連携をコーディネータとして作り上げ、共に実践していった小島氏の事例は、初期教育事業が緒に就いたばかりの三重県でモデルとなるものである。参加者からも、「自分の目の前の子どもたちも、こんなことを考えているのかなあと思った。」「自分のできるところで、人と人をつなげるよう取り組んでいきたい。」という感想が多く寄せられた。講演全体を通して、教員養成学部として三重大学教育学部が次に行けるのかも問われたと思う。心に残る講演会だった。



講師の小島祥美氏、太田エベリネさん、太田カルロスさん

交換留学生

三重大学
での1年間

昨年9月に来学した河南師範大学からの第2回交換留学生が、日本で多くのことを学び、帰国しました。それぞれの思い出を綴ってもらいました。



知らずのうちに、日本にいるのはあと2週間だけになりました。三重大学でいつも迷子になっていた私たちは今どこでも楽にいけるようになりました。しかし、やっと慣れてきたのに、さようならをいわなければならないときを迎えました。

親切な先生、優しい日本人の学生、遊びに連れて行ってくれた留学生・・・みんなと出会えたのは一番幸せなことだと思っています。泣いたり笑ったり、数えられる日には数えられない思い出があります。(趙科) →

一年もう過ぎました。一年間、いろいろ経験したり、見聞したりして、生活が充実していました。感想は、一言で言えば、日本は環境が美しく、明るく輝く先端技術の国だなと強く感じました。そして、アジアで一番進んでいる国と言われる日本の教育がちょっと羨ましいです。テレビで「ゆとり教育」という言葉を耳にするようになりました。中国では、大学に入るために、中学生も高校生も一生懸命教科書を暗記したり、数学を計算したりしなければ、いけません。私にとって、一年の留学生生活は大変貴重な経験だと思います。これから、もっと頑張ろうとおもいます。(王旭) →

教育学部の先生たちのおかげで、私は三重大学に留学の機会があります。日本に来る前に、よく「心細くない?」とか「あっちに慣れるかな」とか聞かれましたが、実は自分としては楽しみにしていました。日本、この世界第二経済強国には、大和民族、この強靱な民族には我々にとって習われるものがたくさんあるし、我々中国若い人はこの東方の国に渡して一生懸命勉強しなければなりません。

日本に来たばかり、日本語をぜんぜん喋りませんでした。教育学部の先生にいていただいて本当に助かります。沢山の日本人学生と友達になります。この一年の留学生生活は貴重な経験として一生忘れません。そろそろ、帰国するので、三重大学を離れなければなりません。これから、中日友好の掛橋になりたいと思います。(李淵慧) ←

